



Title	美術工芸運動と芸術刺繍
Author(s)	山本, 麻子
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 152-153
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53064">https://doi.org/10.18910/53064</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 美術工芸運動と芸術刺繍

山本麻子／筑波学院大学非常勤講師

### 1 芸術刺繍

ヴィクトリア朝中期、ウィリアム・モリスを中心とした美術工芸運動の芸術家の活動から、高い芸術性と職人的な手仕事を理想とする「芸術刺繍」(Art Needlework)が提案された。これは当時流行していた、実用性のない装飾過多の刺繍、特に「ベルリン刺繍」に対する反撃であった。芸術刺繍は、美術雑誌や伝統刺繍を推進する団体などによって推奨されたが、特に1872年の王立刺繍学院設立の影響は大きかった。

王立刺繍学院での刺繍作品の制作・販売および展覧会によって、芸術刺繍はイギリス国内だけでなく、アメリカにも広まり、熱狂的な人気をよんだ。また芸術刺繍は、独身女性のための新しい職業としても推奨され、王立刺繍学院は職業訓練校としての役割も担った。学院の成功から、英国各地に関連校が設立されるなど、英国初の大規模な刺繍教育につながっていった。

### 2 美術工芸運動と刺繍

美術工芸運動にとって、刺繍は重要な表現方法のひとつであった。モリスをはじめ、バーン＝ジョーンズ、ウォルター・クレインも、講師陣として参加し、王立刺繍学院のために芸術刺繍の下絵を提供している。またクレインの妹であるルーシー・クレインは、著書の中で、芸術刺繍の理念と技法を、一般家庭の読者に向けて分かりやすく説明している。

「応接間（ドローイング・ルーム）は、家中でもっとも装飾的な部屋である。（略）応

接間の椅子の背もたれカバーは、細やかなリネン地でレースの飾りがされているべきである。これはさりげないが、デリケートで上品だ。さらに賞賛に値するためには、1色の絹糸、またはクルールワークで、白地に青か金の模様が刺繍されるべきである。」

『芸術と趣味の形成』(Lucy Crane, *Art and the Formation of Taste*, 1882)

クレインは特に、色彩、図案の平面性、全体の調和の重要性について詳しく例をあげた。芸術刺繍の普及は、単なる新しい刺繍技法の伝達に留まらず、室内装飾を中心とした新しい美の概念を中流階級の家庭に対する啓蒙につながった。

### 3 モリスの刺繍

モリスはすでに伝統刺繍の分野で名をあげて、第一人者と見なされていた。モリス商会および王立刺繍学院では、芸術刺繍のキット製品が販売され人気を呼び、商業的にも成功していた。モリスは当初、精力的に刺繍技法の復元や、刺繍作品の計画に打ち込んでいたが、刺繍の作業はもっぱら妻や女友達などが請け負っていた。やがてモリスの次女であるメイ・モリスが23歳のとき、父に代わってモリス商会の刺繍部門の責任者となった。

メイは父の多大な影響を受けてはいたが、彼女独自の刺繍を作り出し、優れた刺繍作品を作り出した。1888年の美術工芸展覧会協会による最初の定例展覧会には、モリスの妻ジェインとメイも作品を発表し、メイはその後の展覧会にも出品している。また、芸術刺繍に

ついでに講演や執筆も数多く行い、1899年にはロンドンの中央美術・工芸学校刺繍科の顧問に招聘され、美術工芸運動の、特に刺繍・テキスタイル分野での指導的人物として活躍した。

モリス商会ではモリスの死後も、以前から人気だったデザインを引き続き「モリスのデザイン」と呼び、本のカバー、ティ・コジー、写真立て、ドイリーなどに応用した作品や、あらかじめ図案がトレースされたキットとして販売していた。これらは機械的な作業で作られる簡易式なものが多く、元来モリスが望んだ刺繍理念からは徐々にかけ離れていった様に見受けられる。

#### 4 新しい刺繍へ

また一方で、1890年代に入ると、美術工芸運動の芸術家から、芸術刺繍に対し反対意見が出されるようになった。

ルイス・F・デイは、美術工芸運動の一員であり、織物、壁紙、スタンドグラスの優れたデザイナーおよび批評家として知られ、また刺繍の歴史研究家でもあった。デイは、著書の中で、芸術刺繍の流行によって、一般愛好者たちが難しすぎる刺繍に精を出している現状や、バーン＝ジョーンズやクレインが描いた装飾過多の刺繍に対して厳しい批判を行った。

「芸術刺繍！ これは現在の指し手の忍耐を無くし、さらに実力以上の大志を抱かせてしまう。昔の仕事、寡黙で目立たない刺繍ステッチの、何が間違いなのだろうか。」

『刺繍の芸術』(Lewis F. Day, *Art in Needlework*, 1900.)

J・D・セディングは、芸術刺繍特有の教会刺繍の模様や芸術的過ぎる図案を痛烈に批

判した。またグラスゴー美術学校では、芸術刺繍の影響を受けつつも、芸術刺繍とは全く異なる独自のグラスゴースタイルを作り出し、後のアール・ヌーヴォーへと受け継がれていくことになった。

#### 5 まとめ

ヴィクトリア朝中期からはじまったモリスと美術工芸運動の活動家による芸術刺繍の啓蒙運動は、刺繍を芸術の域にまで引き上げ、一般家庭に「正しい」装飾理論を広めることに成功した。

美術工芸運動や王立刺繍学院などの革新的な団体と、一流の芸術家の参加によって、1870年代、芸術刺繍は急速に高い水準に到達した。美術工芸展覧会は、当時まだ少なかった女性作家が参加できる場でもあり、メイ・モリスをはじめとする、多くの女性芸術家が作品を発表した。また、男性芸術家がデザインした図案を、その妻が刺繍することが多かったことから、芸術刺繍に携わる女性作家が多く現れた。芸術刺繍の活動によって女性芸術家の活動が促され、その後、女性の手工芸教育に携わる者が多く輩出された。

1890年代には、美術工芸運動の芸術家自らが芸術刺繍に対し批判および意見することで、表現としての刺繍の可能性を広げ、グラスゴー派、アール・ヌーヴォーなど、その後のさらなる刺繍様式の模索へとつながっていった。